

呪文の話など

三輪 太郎

小説家・文芸評論家・東海大学教授



出遣いは教科書でした。一九七九年、高校三年の夏のことです。

筑摩書房版の「現代国語3」に辻さんの「想像力と現実」という講演録(『北の森から』所収)が載っていました。内容は、作家が小説を書く根拠を見出すに至るまでの、いわば精神的オデュッセイアです。言葉が世界をなぞるのではなく、むしろ世界が言葉をなぞる、言葉が世界の形を生み出す、という常識の転換に目が裏返される思いがしました。

その日から、辻さんの本を猛然と読みだしたのですが、どれもこれもおもしろくて、ほぼ全ページに傍線や書き込みが入りました。抜き書き帳も作りました。ただし、タイミングとしては最悪で、大学受験が迫っているのに本を手放せず、翌年、見事に第一志望に落ちました。浪人しても読書の癖は癒えず、どうとう辻さんの母校への入学は叶いませんでした。

さて、時間は飛びます。本にかかわる仕事がたく出版社に入ると、新人ブーツキャンプの週刊誌編集部を経て、出版編集部へまわされました。担当作家表の自分の欄に辻さんの名を見出したときは、天から配剤された人生の幸福量を使い切ってしまったのではないかとひそかに怯えるほどでした。私は上司に内心の興奮を見透かされないよう苦労しました。ファンビ

理で仕事をされては困る、と担当を免ぜられるのを恐れたからです。

仕事上の思い出は尽きませんが、二つだけ告白します。ある日、気負いが昂じて大失敗しました。取ざかしいので、詳細はご勘弁ください。私はすぐに高輪の自宅へ飛んで行って陳謝しましたが、その帰りが深刻でした。とぼとぼ歩いて立ち止まり、とぼとぼ歩いて立ち止まり、公園のベンチで辞表をしたためました。深夜に社へもどると、無人のはずのフロアに上司が独り、待っていました。

「さっき、辻さんから電話があって、君が相当まいつているみたいだから、叱責はひかえてくれ、といわれた。辻さんの顔を立てて、今回の処分は見送る」

私はへなへなと床にうずくまりました……。

こんなこともありました。ある日、新刊の見本を軽井沢の山荘へ届けに行きました。編集者にとって一番うれしい時間です。山荘のテラスで一通り用件がすむと、辻さんが立ち上がり、「さあ、森へ、キュウセイコウコウセイしに行きましょう」とおっしゃる。何のことか、最初はピンとこなかったのですが、かつての旧制高校生のように哲学対話しながら森を散策しよう、という意味のお誘いでした。

夏の終わり、木漏れ日はすでに柔らかく、トンボが群れて滑空して行きます。そういえば、辻さんは夏の終わりが大好きでした。この季節、原稿が一番はかどるんだよ、とよく聞かされたものです。

哲学対話といわれても、私にはたいした話題提供もできません。でも、無言でいるわけにいけないので、最近の職場風景の変化を報告しました。パソコンが侵入して、データを駆使して効率を最大化するのが正しい仕事のやり方だという空気が、職場に蔓延しつつあった、そんな変化への漠たる不安を語ると、辻さんはこう応じてくれました。

「ご存知のとおり、辻の家は医家でね、実学本位なんです。そこへ突如、文学にのめりこむ男が出てきたものだから、親戚の集まりに行くとき肩身が狭い。文学道



パリ・デカルト街のアパルトマン。平成15年(2003)9月24日、「辻邦生 日本の小説家 1980-99年 ここに住む」と伝語で刻まれた存在記念プレートが設置された。(2階壁中央)

楽は人にあらず、という視線が悔しくてね。で、そういうとき、呪文を唱えることにしたんです。おまえたちもいずれ死ぬ。死ぬとき、おまえたちは実学と心中できるか、てね」

これが私にとって、終生忘れることのできない言葉になりました。文芸には現実を外から変える力はありません。しかし、現実を受け容れる心の態度を変える力はある、現実を内側から変える力はある、その確信が私たちの拠って立つ基盤である、だから、今までの仕事のやり方に自信を持ちなさい、と伝えたかったのだろうと受け止めました。俺は実学と心中できないが、文芸とは心中できるぞ、という作家としての覚悟表明だった、とも思います。

私が編集者を辞めたのは、三十六歳のときでした。辞めた理由の詳細はこれまた取ざかしいので、ご容赦ください。退職の挨拶に自宅へ伺うと、辻さん夫妻はにこやかに出迎えて、「餞別としてパリのアパルトマンの鍵を貸しましょう」といってくださいました。もちろん、社交辞令とは承知しながら、私はうなだれて、目をあげることができませんでした。

その後、生活に追われてパリへ行くどころではなく、うかうかと日を送るうちに辻さんが亡くなりました。報せを受けて、山荘へ駆けつけ、棺と対面し、佐保子夫人の前で泣きじゃくりました。山荘は夏の明

る木漏れ日に満たされ、風が吹き抜け、不吉な影など微塵もないのが不思議でたまりませんでした。

パリの土を踏んだのはその十年後、到着してすぐデカルト街のアパルトマンへ直行しました。冬の夜明け前、行き交う人の姿はありません。アパルトマンの前でぼうっと立っていると、冷気が足先から這いあがってきます。しかし、立ち去るのは惜しい。仕方なくコントロールスカルプ広場とアパルトマンとの間を、お百度でも踏むように往復しました。何度目の往復の後でしたか、突然、アパルトマンの一階通用口の扉があき、太鼓腹の中年男が中から出て来ました。彼は警戒の目で私を睨みすえ、腰に吊るした鍵の束をじゃらじゃら鳴らして寄ってきます。

「ムッシュウ・ツジ？」辻さんに会いに来たのか？と問われて、そうです、辻さんは私の師です、と拙いフランス語で答えると、男は急に人なつこい笑みを浮かべ、通用口の扉をあけて、入れ、と目で促しました。

敷居をまたぐと、薄暗い通路が奥へ延びています。剥き出しの粗石積みの壁を撫でると、ここに辻さんが暮らしたという事実の確かさが急に心に迫ってきて、その場にうずくまりました。すると、背後で扉の閉まる音がしました。コンシェルジュ(管理人)は親切にも、私を先生と二人きりにさせてくれたのです。闇のなかで私は、分不相応な幸福を得ながら途中で放棄してしまった身勝手を、先生に詫言いました。



昭和55年(1980)頃 デカルト街アパルトマン書斎にて

三輪太郎 プロフィール

小説家・文芸評論家。東海大学教授。昭和37年、名古屋生まれ。早稲田大学第一文学部卒。文藝春秋で9年ほど編集に携わる。平成2年、群像新人文学賞(評論部門)を三島由紀夫論で受ける。著作は『あなたの正しさと、はくのセツナさ』『死という鏡』(以上講談社文庫)『憂国者たち』『大黒鳥』(講談社)『村上春樹で世界を読む』(共著・祥伝社)など。

背景イラスト：井上佳子



平成8年(1996)11月 竹葉亭にて 左より 筆者、辻佐保子、辻邦生、装幀家・中島かほる、元中央公論社マリ・クレール編集長・井上明久